

インフォメーション

問い合わせ・申込み：仙台市市民活動サポートセンター
TEL 022-212-3010 / FAX 022-268-4042 Mail sendai@sapo-sen.jp



グラレコ入門・可視化講座 ～描くと見える私のミライ～

日 時:2月1日(土) 13:30～16:30
会 場:仙台市市民活動サポートセンター 研修室5
講 師:しわしわカンパニー 代表 山崎史香さん
定 員:20名(先着順)
内 容:グラフィックレコーディング(グラレコ)とは、会議やセミナーの内容を図や文字・絵を組み合わせたグラフィックで可視化することです。講座ではデザインや絵画のスキルがなくても、簡単な図形や線が書ければ誰でも簡単にできるグラレコを学びます。文字だけでは伝わりづらい議論内容を直感的に理解できるカタチに変換することで、自分たちの活動を団体内外へ伝える力を身につけます。
対 象:グラレコに興味がある、活動内容を整理したい、情報発信を強化したい方
参加費:無料

奇数月最終金曜の夜はサポセンに集合! サポセンフライデー 「1月は新年会!」

日 時:1月31日(金)19:00～20:00
(18:30開場・入退場自由・申込不要)
会 場:仙台市市民活動サポートセンター 1Fマチノワひろば
参加無料・ソフトドリンク飲み放題・駄菓子食べ放題
当たり年は「子年」「丑年」ですが、当たり年以外の方も参加できます。仙台市市民活動サポートセンター(サポセン)には、地域の課題解決や地域の魅力向上に取り組む人たちが、それを支える市民の皆さんが来館しています。そんなサポセンユーザー(来館者)の皆さんが、気軽に集まり、交流できる場です。市民活動団体でも企業でも町内会でも教育機関でも、行政や外郭の人でも、サポセンのヘビーユーザーから、まだサポセンに入ることの無い方まで、地域のことに関心がある人ならどなたでも参加できます。



初めての市民活動を応援します「はじめての助成金申請」「はじめての協働」

日 時:2月1日(土)
「はじめての助成金申請」10:00～11:00 「はじめての協働」 11:40～12:10
内 容:「はじめての助成金申請」では、活動資金についての基礎から、知っておきたい助成金の特性、申請書を書くコツを学びます。「はじめての協働」では、協働について基礎知識、協働をすすめるコツなどを学びます。どちらか一方だけでも、両方でも受講可能です。講座の間の時間に、日本郵便株式会社と仙台市それぞれの助成事業についての紹介も予定しています。
会 場:仙台市市民活動サポートセンター 研修室5
定 員:各15名(先着順)
対 象:●これから活動を始めようと考えている方 ●資金調達の必要性に迫られている団体 ●助成金の獲得に苦労している方・団体 ●新規設立団体・NPO法人 ●協働について知識を得たい方など
参加費:無料
申込み:メールでお申込の方は、件名を「はじめて講座」として、氏名・電話番号・質問事項をお知らせください。



つながる つなげる サポセン

仙台市市民活動サポートセンターとは

様々な分野の市民活動、ボランティア活動の支援施設です。「自分たちのまちをもっと良くしたい」。そんな市民の自発的な活動を応援します。

ご相談ください

ボランティア活動をしたい／団体を立ち上げたい／組織運営の悩みを解決したい／他の団体や他のセクターと連携したい／自分のスキルを地域や社会に役立てたい…

今月の休館日 1月8日(水)、22日(水)

開館時間 月曜日～土曜日 9:00-22:00
日曜日・祝日 9:00-18:00
休館日 毎月第2・第4水曜日(祝日の場合は翌日木曜日)年末年始

〒980-0811 仙台市青葉区一番町四丁目1-3
TEL 022-212-3010 FAX 022-268-4042
地下鉄南北線「広瀬通駅」西5番出口すぐ／地下鉄東西線「青葉通一番町駅」北1番出口から徒歩6分
[HP]<https://www.sapo-sen.jp> [Blog]<http://blog.canpan.info/fukkou/> [Twitter][@SCSC4CA](https://twitter.com/SCSC4CA)

仙台市市民活動サポートセンターは、特定非営利活動法人せんだい・みやぎNPOセンターが仙台市の指定管理者として、管理運営を行っています。[指定管理期間2015年4月1日～2020年3月31日]

市民ライターが、仙台の市民活動団体やワクワクビトを取材しています！

▶市民ライター
http://blog.canpan.info/fukkou/category_23/1



▶「ぱれっと」バックナンバーはホームページからダウンロードできます。
▶ぱれっとに関するご意見をお寄せください。

[ぱれっと読者アンケート]サポセンホームページからアクセス
いただくか、携帯電話等で2次元バーコードを読み取ってご利用ください。



発行 仙台市市民活動サポートセンター
発行日 2020年1月4日
編集 特定非営利活動法人せんだいみやぎNPOセンター
デザイン PEACE Inc.
編集人 太田貴 菅野祥子 松村翔子 水原のぞみ 小林正夫
発行部数 3000部
配布場所 市内公共施設や行政窓口、市内一部店舗、市内外の支援施設

はねれっと

仙台市市民活動サポートセンター通信 ぱれっと 2020 No.245

“ぱれっと”には、仙台市市民活動サポートセンター(サポセン)にいろいろな人が集まり、それぞれの色(個性)が発揮され、新しい出会いや活動が生まれていく。そんな願いがこめられています。



仙台をワクワクさせる人物をご紹介します

今月のワクワクビト

外国人の子ども・サポートの会 サポーター会員

バダムラグチャー

ガンビレグ

Badamragchaa Ganbileg さん (23)

外国人の私だから 教えられることを

モンゴル出身のガンビレグさんは宮城大学の4年生です。言葉も習慣も分からない国で13年生活してきた経験を活かし、大学3年から「外国人の子ども・サポートの会」で外国にルーツを持つ子どもたちに日本語や勉強を教えています。また、外国人の親子対象のイベントで体験談を話すこともあります。10歳で来日し、公立の小学校に入学。1年目は友達や先生の話聞き取ることで精一杯でした。12歳からサポートの会に通い、日本で暮らす外国人の先輩たちとの交流を通じて日本語が話せるように。一方、漢字は中学まで分からず、「微妙」と「絶妙」のような似た発音を持つ単語の意味を区別できなかったり、感覚を表現する「しっくり」といった言葉の理解に苦戦したり、壁にぶつかることもありましたが、疑問を周囲に聞けず、後で恥ずかしい思いもしました。「日本語が母国語ではないから苦労する子の気持ちがわかるし、勉強以外にも伝えられることがある。今後協力していきたい」と話します。

取材・文 市民ライター 平塚 千絵

特集

生出においで！地域の魅力を創出する
民家(空き家)再生・活用プロジェクト

突撃
レポート！

LGBTQの中高生が
「生きる」ために必要なもの

外国人の子ども・サポートの会

TEL 090-2793-8899 FAX 022-375-5639 Mail jets@sda.att.ne.jp

日本に暮らす日本語を母国語としない子どもたちにとって、言葉の問題は学習の遅れや進学、就職など将来に大きく関わってきます。サポートの会は、2005年から主に仙台市内の公共施設で週1回2時間程度、小学生から高校生の外国人に日本語や学校の科目を1対1で教える活動をしています。教えるのは、サポーター会員と呼ばれるボランティアです。その他、会員同士の交流会や仙台市内で活動する外国人支援団体と「進路ガイダンス」を開くなど外国人親子の支援をしています。

地域の課題を解決するために、様々な立場の人たちがコラボレーションする取り組みをご紹介します

生出^{おいで}において！地域の魅力を創出する民家(空き家)再生・活用プロジェクト

仙台市南西部に位置する生出^{ふもと}地区は、太白山の麓に広がる自然豊かな山間部です。歴史ある文化や史跡を有し、古くからの集落が点在しているこの地域には、人が住まなくなった民家や使われなくなった小屋が多くあります。生出地区の人々と、太白区に拠点を持つ大学とが、民家再生を通じて地域の魅力を発見していく取り組みを紹介します。

民家(空き家)再生・活用プロジェクト

地域資源を多くの人と共有して、
地域再生につなげたい



委員長
ぬまた えみこ
沼田 恵美子 さん



副委員長
おおたかし
太田 孝 さん

----- 生出地区まちづくり委員会 -----

地域課題を解決に導くための
きっかけづくりをしたい



工学部 建築学科 准教授
ふ わ まさひと
不破 正仁 さん

----- 東北工業大学 -----

地域資源を活かす、まちづくり

太白区の生出地区にある「旧守屋邸」は、仙台市内最古といわれる民家で、今は空き家になっています。2019年11月4日、改修により生まれ変わった「旧守屋邸」のお披露目会「みんな開き」がありました。当日は、この民家再生に関わった人々や、縁あって訪れた人で賑わいました。室内には、古道具を活用したテーブルを置き、この日限定で「民カフェ」を設え、庭ではガラクタ市を開き、改修作業中に捨てられることになっていた器を並べました。改修作業を主導したのは、東北工業大学建築学科(以下、東北工大)と、生出地区まちづくり委員会(以下、委員会)です。地域資源である民家や空き家といった建築物を活かそうと、「民家(空き家)再生・活用プロジェクト」に取り組んでいます。他にも、同地区内の木造2階建ての納屋の改修が進行中です。東北工大准教授の不破正仁さんは、「農家の普通の納屋ですが、関わりを持ち続けることで愛着が湧き、そこに交流が生まれ人と人の繋がりが生まれます。学生たちは徐々にその価値に気がついていくんです」と、話します。

掃除からはじまる、地域再生

不破さんが主宰する保全型地域計画研究室(以下、不破研)では、環境が育んだ地域資源をまちづくりに活かし、地域固有の景観を次世代に残そうと、伝統的な民家や集落の調査研究を行っています。2016年、東北工大に赴任したばかりの不破さんは、何かできることはないかと各地を調査しながら模索していました。一方、委員会では、まちづくりの担い手不足解消や仲間づくりのため、区から助成金を受けて農業のイロハを学ぶ農業塾や、地域特有の文化や歴史遺産を学ぶ歴史文化塾を住民向けに開いていました。

再生プロジェクトの始まりは、委員会と不破さんの思いの双方を知り人物の紹介でした。不破研は、太白区地域連携助成を受け、出会った農家の納屋を掃除することから着手。学生たちは、「地域の人と一緒に掃除をすることで、親睦が深まりました」と振り返ります。一緒に手を動かすうちに新しいアイデアが生まれ、納屋の1階は農作業もできる農業塾の教室に。2階は学生たちの活動拠点になりました。自然と対話の機会が増え、農業塾メンバーが学生たちにおにぎりやカレーを差し入れたり、販売する農作物のパッケージデザインを相



談したりすることも。委員長の沼田恵美子さんは、「みんなと会って、情報交換する時間が大切なんだと思うようになった」と言います。さらに、地域の魅力を発信する媒体として地図をつくろうと、まち歩きを実施。空き家になっていた旧守屋邸を発見したのはこのときでした。副委員長の太田孝さんが間に入り、「掃除」を申し出たところ、家主は「愛着ある家を解体したくなかった」と快諾。改修作業では、話を聞きつけた地元の大工が床板剥がしや、床板の張替のコツを学生たちに教えました。家主からは改修後も、「関係が終わるのは寂しい。今後も地域や学生たちの拠点として使ってほしい」と提案され、まちの拠点が少しずつ広がっています。

地域に関わり続けるきっかけを創出する

プロジェクトによって、地域に関わる人が増えただけでなく、「次に何をしようか」とアイデアが生まれるみんなの基地ができました。不破さんは「地域に関わり続けるきっかけをつくることで、地域課題に触れる機会が得られるのでは」と話し、「足を運び続けられる限り関わっていきたい」と熱を込めます。(取材・文 水原のぞみ)

- 生出地区まちづくり委員会
〒982-0251 太白区茂庭字新熊野 64 番地 生出市民センター内
- 東北工業大学 工学部 建築学科
〒982-8577 太白区八木山香澄町 35 番地 1 号 TEL 022-305-3600



活動に役立つ書籍をご紹介します

お役立ち本

ラッキーとの日々

～東日本大震災・愛犬と家族の絆をつつた手紙～

文:渡部 真理子 絵:さとう なつき 制作:読み聞かせサークルこだま

福島第一原子力発電所事故により急な避難を余儀なくされた一家は、愛犬ラッキーを一人ぼっちで福島に残してきてしまいます。ラッキーを苦しめたと自分を責める子どもたち、傷つく我が子を探す両親。本書には家族が互いに支え合い、日常を取り戻そうと奮闘する様子が描かれています。大震災という大きな悲しい出来事の中に、一人ひとりのドラマがあったことを教えてくれるある家族の実話です。



活動を始める一歩を応援します

コトハジメ

あなたのできることで、できる時間にボランティア活動しませんか？

南光台及びその周辺地域を中心とした仙台市民を対象に、住民同士がお互いさで助け合う活動です。内容は、家事や病院の付添い、子育てのお手伝いなどの生活支援。コミュニティカフェの食事づくりやお弁当配達。ふれあいサロンのお手伝いなど。※見学・体験希望の方はお電話で。<問い合わせ> NPO法人地域生活支援オレンジネット 〒981-8002 仙台市泉区南光台南1-1-23 TEL 022-251-6435 (平日10:00～17:00) HP <http://chiiki-orangenet.org/>



市民ライター 前川珠子さんの突撃レポート！

取材団体名 / HOMEY(ホームー)

LGBTQの中高生が「生きる」ために必要なもの



▲お勧めの本を持ち寄る読書やカードゲームなどをして過ごします。



代表 あゆみ
HP <https://homey-touhoku.github.io/>

レズビアン、ゲイ、バイセクシャル、トランスジェンダーや、性のあり方がわからない、決めたくないクエスチョニングといった性的マイノリティは、その頭文字をとってLGBTQと言われ、全人口の約8パーセントを占めます。

LGBTQの子どもたちが成長する上で、特に困難を覚えるのは自我が芽生える10代の頃。仙台の市民団体HOMEYは、東北のLGBTQの中高生が気軽に集まり寛ぐための場所です。代表は大学3年でトランスジェンダーのあゆみさん。17歳のときに仲間とこの会を立ち上げました。「性自認と体の不一致で、制服選択や、男女どちらのトイレにも入れない等の苦しさがあった」と、自身の経験を話します。減少傾向が続く自殺統計の中で唯一増え続ける10代の自殺。その中には、性的マイノリティ

の子どもも多いのではないのでしょうか。社会に対し、「対策すれば幸せになる人が必ずいる。誰もが情報や支援に繋がれる仕組みを作ってほしい」とあゆみさん。今悩んでいる10代の子には、「HOMEYのような場所は誰にでも作れる。今は見えなくても話を聴いてくれる人や居場所は必ずあると伝えたい」と話します。

「性的対象・指向」を表すLGBと、自分の性別をどう自覚するかという「性自認」を表すTQは、抱える課題も多様です。性のありようを偽らずにいられるだけで人は楽になれる。人知れず悩む子どもたちのためにも、性の多様性を私たちが広く受け入れ、誰もが自分らしく生きられるような社会をと、望まずにはられません。